

ナガラ原東貝塚出土ゴホウラ製腹面貝輪片について

川口陽子
筑紫野市教育委員会

KAWAGUCHI Yoko
Board of Education Chikushino City

はじめに

南海産貝製腕輪（以下、貝輪）は琉球列島以南の海に生息する大型巻貝のゴホウラ・イモガイを用いた腕輪で、九州西北部沿岸の二枚貝製貝輪を使用する地域を經由して、弥生時代前期に北部九州で成立（高倉1875、木下1982）した。北部九州をはじめとする貝輪の消費地と貝素材の供給地である琉球列島との間には、「貝の道」といわれる貝交易が活発に行われていた。

これまでの研究は消費地側で発見される貝輪の形態分類や位置付けなどが主であったが、近年琉球列島では貝輪の素材であるゴホウラ・イモガイの集積遺構⁽¹⁾や、加工段階の資料が多数確認され、製作工程の復元⁽²⁾など供給地側からみた貝交易の実態が少しずつ明らかになりつつある。ナガラ原東貝塚の調査でも貝輪の加工に関する資料が確認されている。今回はその中でも消費地で未確認の腹面貝輪の破片を取上げ、形態的な特徴を整理し、その位置付けを検討したい。

1. ナガラ原東貝塚出土資料

ナガラ原東貝塚出土資料（以下、ナガラ原東資料）は2001年度に行われた第5次調査中に第V層から出土した（図2-1）。第V層は出土土器や自然科学的検討からその所属時期は6世紀代とする指摘がある。

資料は腹面の水管溝（図1参照）部分のみの出土で、全体像の復元は難しい。計測値はすべて残存長で縦2.8cm、横3.5cm、厚み1.2cm、重さ8gである。手を通す内孔は端部がほぼ欠けているが、残っている部分を観察すると端部がやや外傾するため面取りを施していた可能性もある。立体的なゴホウラを可能な限り平坦な板状に仕上げしており、全体的に入念な研磨を施している。このことから、本資料は加工段階に破棄された未成品ではなく、製品の破片と考えられる。また、ゴホウラの殻軸をとりいれており、下端部を鋭利に砥ぎ出すように研磨している。報告ではその板状の形態から、貝輪の消費地である九州で弥生時代中期後半に隆盛する立岩型貝輪や、終末期に登場する竹並型貝輪に関連する資料ではないかとの指摘がなされている。

本資料の特徴をまとめると以下の2点である。

- ① 殻軸をとりいれ、板状の形態である。
- ② 全体を丁寧に研磨しているため製品の破片と考えられ、下端部を鋭利に砥ぎ出している。

2. 類例資料について

2.1. 集成

ナガラ原東資料の形態的特徴である殻軸をとり込む腹面貝輪の資料は、現在のところ表1の5遺跡6点が確認されている⁽³⁾。すべての資料は破片資料で、全体像の復元は難しい。

次にその資料を紹介しながら、ナガラ原東出土資料との比較を行いたい。

表 1 ナガラ原東貝塚出土腹面貝輪 関連資料一覧

遺跡名	出土地点	所在地
1 大風呂南墳墓群	1号墓第1主体部	京都府与謝郡与謝野町
2 長浜金久第Ⅲ遺跡	第1地点D-4区第4層	鹿児島県奄美市笠利町
3 野国貝塚群	B地点Ib層	沖縄県中頭郡嘉手納町
4 平屋敷トウバル遺跡	8地区試掘	沖縄県うるま市
5 大久保原遺跡	3次調査 P-38表土	沖縄県中頭郡読谷村
6 大久保原遺跡	N76 表土	

2.1.1. 大風呂南1号墳出土資料

大風呂南1号墳出土資料（以下、大風呂南資料）は、弥生時代後期後半に築造された墳丘墓の第1主体部より、碧玉製管玉・有鉤銅釧・ガラス釧などの装身具や鉄剣や鉄鏃など豊富な副葬品と共に出土した（図2-2）。その中で貝製品は有鉤銅釧13点と共に被葬者の頭部上位から布につつまれた状態で確認された。

資料はゴホウラの腹面の水管溝部分のみの出土で、残存長で縦3cm、横3.1cm、厚み1.6cm、重さ6gである。遺存状況が悪く殻軸側の加工状況は判別できないが、表面と孔の端部に研磨面が確認できる。厚みは薄いもののゴホウラ本来の体層のふくらみが残し、板状の形態とまでははいえない。殻軸をとり込み、巻貝構造を残している。

2.1.2. 長浜金久遺跡第Ⅲ遺跡出土資料

長浜金久遺跡第Ⅲ遺跡出土資料（以下、長浜金久資料）が出土した第Ⅲ遺跡は第1～3地点まであり、資料野出土した第1地点第4層の包含層には弥生時代後期～古墳時代にかけての土器片や、有孔貝製品や貝匙片も含まれていると報告されている（図2-6）。

資料は残存長で縦4cm、横3.4cm、厚み1.4cm、重さ11gである。板状の形態で全体に丁寧な研磨が施されており、端部は鋭利である。殻軸をとり込んでおり、下先端には研磨による抉れが確認できる。

2.1.3. 平屋敷トウバル遺跡出土資料

平屋敷トウバル遺跡からはゴホウラ腹面・背面貝輪・イモガイ横型貝輪など多数の貝輪製作関連資料が出土しており、中には研磨が行き届いた製品の破片も含まれる⁽⁴⁾。平屋敷トウバル遺跡出土資料（以下、平屋敷資料）は試掘による出土で、残存長4cm、横4.4cm、厚み1.3cm、重さ25.4gである。全体が丁寧に研磨され、端部は鋭利である。特に板状の形状を意識しており、ゴホウラ本来の体層のふくらみがまったくないほど全体が平らな面で整形されている（図2-5）。

2.1.4. 野国貝塚群B地点出土資料

野国貝塚群B地点出土資料（以下、野国資料）は攪乱部からの出土で、残存長6.8cm、横4.3cm、厚み1.2cmである（図2-3）。細部にわたって研磨が施され、表面には研磨による面がいくつも形成されている。他の資料と比べて残存率はよいが、全体像の復元までは至らない。攪乱部からは他にも腹面利用のゴホウラの加工品が出土しているが、研磨段階で製作途中の資料と考えられる⁽⁵⁾。

2.1.5. 大久保原遺跡出土

大久保原遺跡出土（以下、大久保原資料）は2点あり、ともに表土からの出土である（図2-4・7）。大久保原遺跡は3次調査まで行われ、特に本資料が認められた3次調査では弥生土器が多数出土している。遺跡の報告書は未刊行だが出土土器は仲宗根氏らによって報告されており、「刻目突帯文系

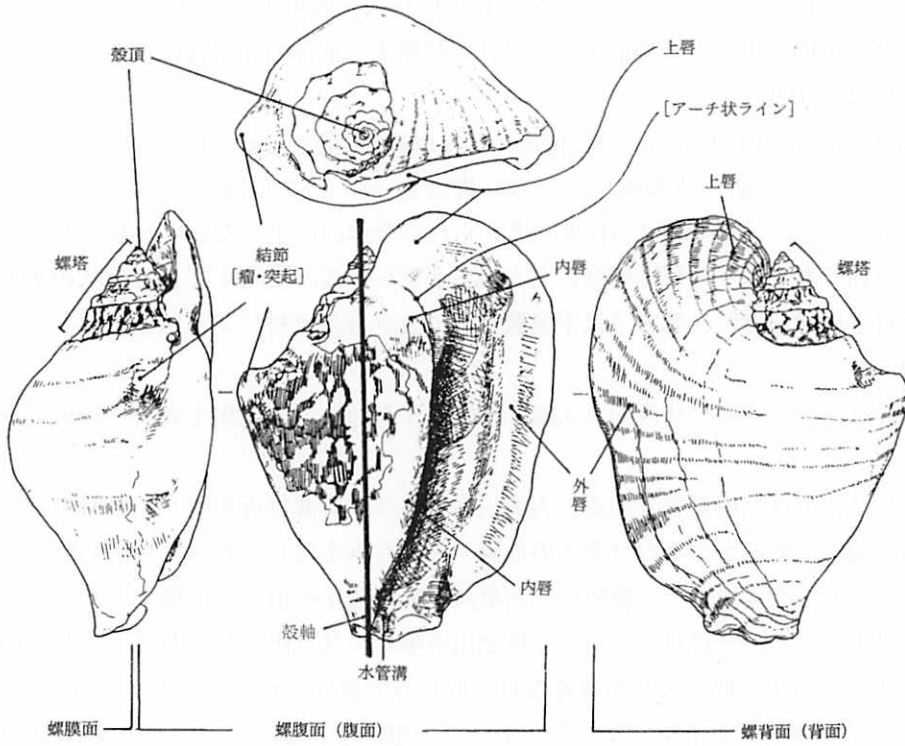
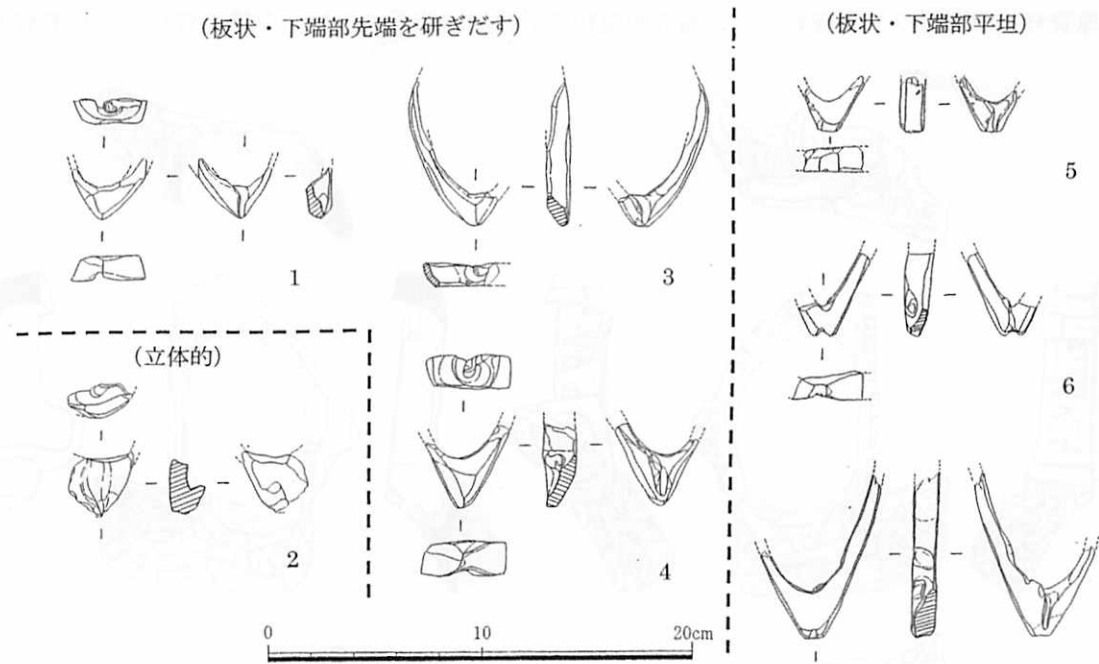


図1 ゴホウラ各部名称
(木下1996 p265より転載、一部改変)



1. ナガラ原東貝塚 2. 大風呂南1号墳 3. 野国貝塚B地点
4. 7. 大久保原遺跡 5. 平屋敷トウバル遺跡 6. 長浜金久第III遺跡

図2 ナガラ原東貝塚出土資料および類例資料

甕から入来Ⅱ式甕・山ノ口式近似壺など弥生時代中期以前に収束する」時期の資料や、「多条突帯貼付壺など弥生時代中期後半から後期前半」とされる時期まで遺跡の存続幅は長期にわたると述べられている（仲宗根ほか2001）。

資料1（図2-4）は残存長4cm、横4cm、厚み1.6cm、重さ15gである。前面に丁寧な研磨を施しており、表面には研磨面が複数確認できる。資料2（図2-7）は残存長7.9cm、横5.8cm、厚さ1.2cm、重さ28gである。残存率は1/3程度と考えられ、全体的に丁寧な研磨が施され、板状の形態で端部がとても鋭利である。下端部は研磨による抉れが見られる。資料1と2は板状の形態と厚みなどが異なり、資料1は野国資料、資料2は平屋敷資料や長浜金久資料によく似る。

2.1.6. 分類

上記の資料群は形態や研磨の状況から大別できる。すなわち、本土出土資料と琉球列島出土資料である。

本土出土資料は、大風呂南資料である。大風呂南資料は水管溝付近を残し、殻軸をとり入れる点で他の資料との共通点はあるがゴホウラ本来の体層のふくらみを残しており、板状の形態とは言い難い。この資料を考える上で参考にしたい資料が、古墳時代前期後半の前方後円墳である大阪府茨木市所在の紫金山古墳出土のゴホウラ製貝釦である。紫金山古墳から3点出土しており、これらの貝釦は巻貝の立体的な形状をそのまま取り入れる複雑な貝の取り方で製作されているため（図3）、この時期に畿内ではゴホウラの原貝を入手するルートがあったと想定される⁽⁶⁾。大風呂南資料はゴホウラの体層の丸みを残すその形態と時期などから勘案して、古墳時代前期の貝交易の前段階の一端を表す資料である可能性がある。

琉球列島出土資料はすべて研磨が丁寧に行き届いていることから、「製品」もしくは、ほぼ製品に近い資料と考えられる。その中でも、研磨面が複数あり端部がやや丸みを帯びる資料（野国資料・大久保原資料1・ナガラ原東資料）と、端部が鋭利で下端部に若干の平坦面を持つ資料（平屋敷資料・

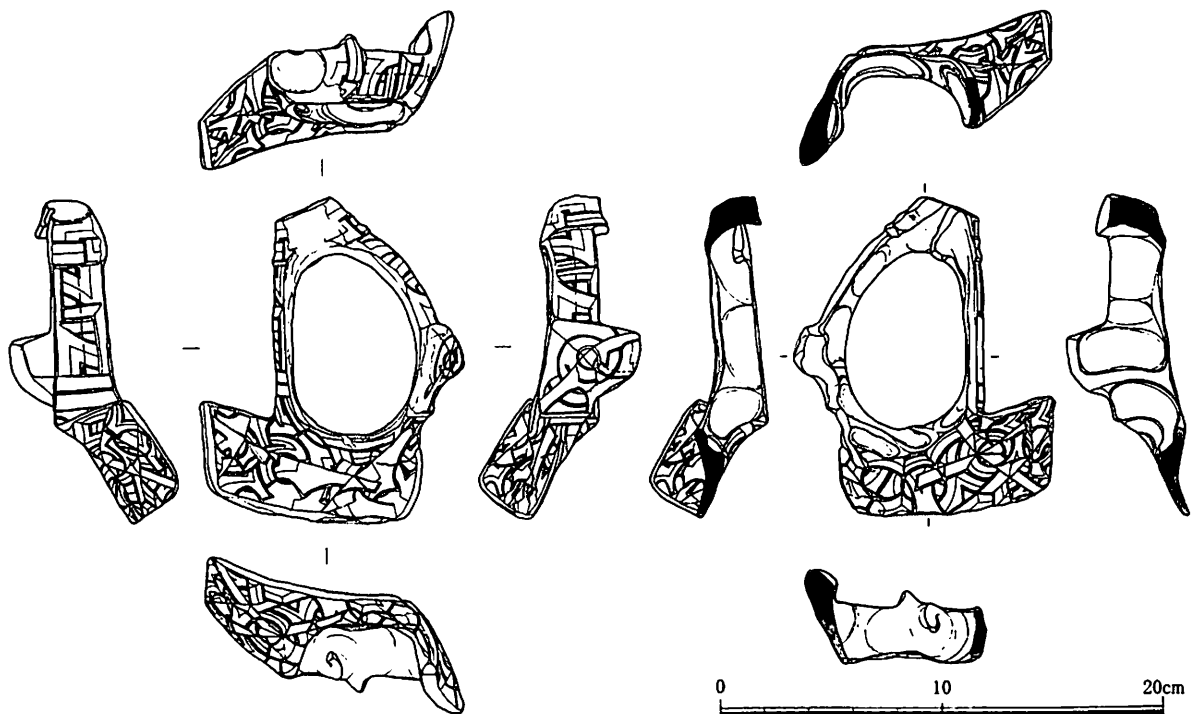


図3 紫金山古墳出土ゴホウラ製貝釦

長浜金久資料・大久保原資料2)の2つに分けられる可能性がある。時期が判明している例は大風呂南資料のみ(弥生時代後期後半)であり、琉球列島で出土する資料の時期は現在のところ確定できない。

2.2. 消費地で出土するゴホウラ腹面貝輪との比較

次に上記の資料と消費地で確認されている型式の貝輪の比較を行う。腹面貝輪の中で板状の形態には「立岩型貝輪」と「竹並型貝輪」がある。

立岩型貝輪は弥生時代中期後半に北部九州で隆盛し、甕棺墓から被葬者の右腕に装着された状態で出土する。装着数は14点から20数点と多く、多数装着する点が特徴である。厚さが1cm前後の板状で、下端部は水管溝の端部を磨り切って平坦面を作る。その幅は貝輪の大小にかかわらずおよそ2~2.5cmの範疇に収まる。これは立岩型貝輪が多数装着し、その際の見た眼を重視しているためである。

竹並型貝輪は弥生時代終末期に属すると考えており、厚みは1~2cmと、立岩型よりも若干厚い例もあるが板状の形態を引き継いでいる。これらの貝輪とナガラ原東資料をはじめとする類例資料を比較すると、その厚みや細部の研磨などはよく似ている。しかし、最も異なる点は立岩型および竹並型貝輪は殻軸をとり込まず、下端部の内側には巻貝構造が現れない。

つまり、ゴホウラの利用部分がやや異なっており、ナガラ原東資料をはじめとする腹面貝輪片は立岩型貝輪にも竹並型貝輪にも当てはまらない。では、どういった貝輪が想定できるだろうか。

1つ目は立岩型貝輪の加工段階の資料という案である。平屋敷資料をはじめとする端部が鋭利な資料群はとくに板状の形態を意識しており、図5の破線のように下端部の形状を平坦面作成前と考える

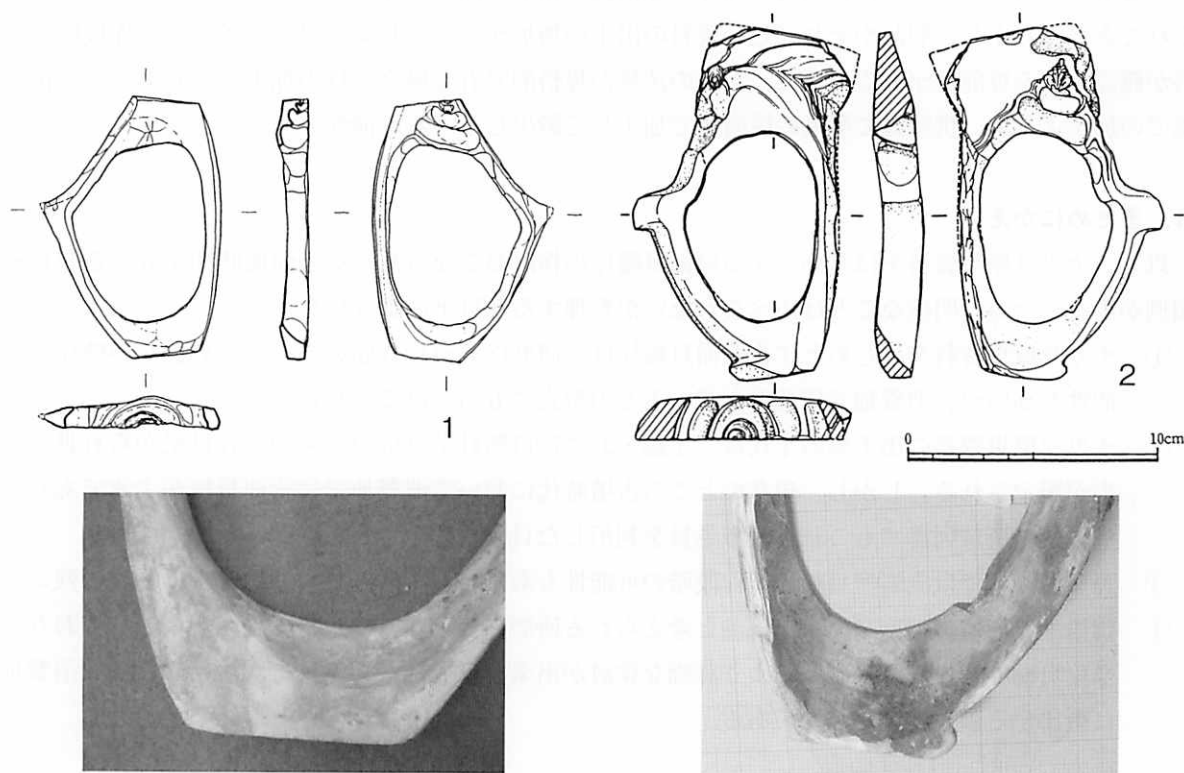


図4 立岩型貝輪・竹並型貝輪実測図および下端部内側写真
1 (立岩型) 三津永田遺跡出土 (A-5) 2 (竹並型) 伝 竹並出土 貝輪1

と、立岩型貝輪の加工段階の一端を示す資料とも考えられる。この案では消費地での腹面貝輪の出土は弥生時代に限られ、年代のうかがえるナガラ原東資料の6世紀代では背面貝輪が主流であるため、年代に大きな齟齬が生まれる。また、殻軸をとり込む貝の体層の取り込み方の違いが問題となってくる。

2つ目はこれまで確認されていない型式とする案である。この場合、消費地でなく琉球列島との貝輪と考えることもできるが、現在のところ琉球列島での大型巻貝を利用した貝輪習俗は明らかになっていない⁽⁸⁾。

ナガラ原東資料をはじめとする腹面貝輪資料の位置付けには様々な課題があるが、合わせて注目すべきであるのが、近年伊礼原遺跡より諸岡型貝輪の製品と考えられる資料⁽⁷⁾が一括して出土するなど、入念な研磨を施した「製品」と認定できる貝輪資料が増加してきている点である。筆者は以前に立岩型貝輪を中心とする弥生時代の腹面貝輪の法量を検討したことがある(川口2009)。その検討の結果、立岩型貝輪の法量は例えば縦11cmの場合は横約7.5cmと遺跡間で大きさが共通するため、素材となるゴホウラの大きさに規制されると結論付けた。また、手を通す孔の大きさにも遺跡間で大きな変化はなく、貝輪の一連のセットは規格的な法量で製作されていることを指摘した。

これまでの研究では鹿児島県の高橋貝塚などで粗加工品が見つかったことや、貝輪は個人が装着するものであることから、供給地である琉球列島で粗加工品を製作し、消費地で完成させたと考えられてきた。しかし、製品やそれに近い資料の出土の増加から、これまで以上に多様な製作段階の資料が確認される可能性がある。また、貝輪の法量が規格的で有る場合、貝の加工になれていない消費地での加工よりも、供給地で製品の段階まで加工して搬出している可能性も考える必要がある。

3. まとめにかえて

以上、ナガラ原東資料をはじめとする腹面貝輪片の検討おこなった。その帰属時期が分かる資料や類例が少ないため、明確なことは述べられないが整理すると以下のようなになる。

- ① ナガラ原東資料をはじめとする腹面貝輪片は、研磨作業が行き届いているため製品の破片の可能性が高いが、消費地で確認されているどの型式にも当てはまらない。
- ② ナガラ原東資料の出土層の年代は、土器・および自然科学分析の結果から5世紀から6世紀前半が想定される。しかし、現在のところ古墳時代において消費地では背面貝輪が主流であり、供給地の琉球列島でもこれら大型巻貝を利用した貝輪を装着する習俗は確認できない。
- ③ 一部の資料では立岩型貝輪の製作段階の可能性もあるが、時期と貝の利用部位に課題が残る。
- ④ 供給地である琉球列島で、完成品と考えられる研磨の行き届いた資料の出土が増加しており、今後貝輪の製作段階についてより詳細な検討が出来る可能性がある。また、どの段階で消費地に搬出するのか検討が必要である。

ナガラ原東資料は類例も含めて年代の明確な例が少なく、資料の増加を待ち今後も引き続き検討を行いたい。

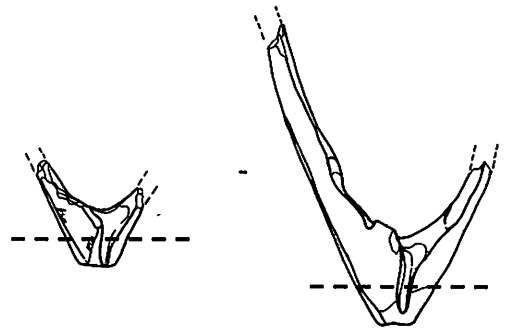


図5 製品推定図 (S=1/2)
(左 平屋敷トウバル遺跡、右 大久保原遺跡)

拙論を成すにあたり中村友昭氏、仲宗根求氏、東和幸氏、山野ケン陽次郎氏に様々なご教授をいただきました。また、山野ケン陽次郎氏には実測図をご提供いただきました。心よりお礼申し上げます。

資料調査では諸機関で便宜を図っていただきました。末尾ながら記して深謝いたします（五十音順、敬称略）。

沖縄県立埋蔵文化財センター 沖縄県読谷村立歴史民俗資料館 鹿児島県立埋蔵文化財センター ふるさとミュージアム丹後 与謝野町教育委員会

注

- (1) 島袋1981、岸本・島1985、新里2001、高宮・知念2004などでゴホウラなどの貝輪の素材となるゴホウラ・イモガイの集積遺構や弥生系文物出土の遺跡の集成と検討が行われている。
- (2) 島袋1981、仲宗根1995、神田1999で貝輪の製作工程の復元案を示している。
- (3) 筆者は大風呂南1号墓第1主体部出土例と平屋敷トウバル遺跡出土例の関連は、以前に想定したことがあったが、そのほかの資料に関しては山野ケン陽次郎氏のご教授による。
- (4) 『平屋敷トウバル遺跡』p116～p132。特にゴホウラ腹面貝輪の資料には、北部九州で弥生時代中期後半に隆盛する立岩型貝輪の製品の破片も含まれる。また、イモガイ横型貝輪の製作段階が分かる資料も豊富で、螺頭部を磨り切りながら整形する工程が確認できる。
- (5) 『野国』 p69・p70
- (6) 未盗掘の古墳時代前期古墳として著名な闘鶏山古墳（大阪府高槻市）でもゴホウラとみられる巻貝が確認されており、今後の検討が必要であるがこの時期にもゴホウラの需要があったことが想定される。
高橋公一ほか『闘鶏山古墳石槨画像・環境調査報告書』2007 高槻市教育委員会
- (7) 伊礼原遺跡E-19第4層から4点まとまって出土した。丁寧な研磨を施しており、法量がそろった点などは複数着装を想定したもので、「諸岡型貝輪」の製品と考えられる。平屋敷トウバル遺跡では立岩型貝輪やイモガイ横型貝輪の破片が、伊礼原遺跡E-19、第4層から諸岡型貝輪の完形品・破損品やイモガイ横型貝輪が、大久保原遺跡でも諸岡型貝輪の製品に近い資料が出土している（仲宗根1995）。
- (8) 山野氏は殻殻をとり込む貝の取り方や年代観から、琉球列島で使用された貝輪の可能性を指摘されている。また、琉球列島で貝輪習俗は明らかでない点などご教授いただいた。

文献

- 川口陽子 2007「南海産貝輪資料」『福岡大学考古資料集』1 pp.29～43 福岡大学考古学研究室
- 川口陽子 2009「南海産貝製腕輪における立岩型貝輪の位置付け－非着装貝輪の出現と意義」『九州考古学』pp.1～21 九州考古学会
- 神田 涼 1999「南海産貝輪製作工程の復元」『琉球大学考古学集録』創刊号 pp.5～15 琉球大学法文学部考古学研究室
- 岸本義彦・島 弘 1985「沖縄における貝の集成遺構」『紀要』2 沖縄教育委員会文化課
- 木下尚子 1980「弥生時代における南海産貝輪の系譜」『国分直一博士古希記念論集 日本民族とその周辺』考古編 pp.311～358 新日本教育図書
- 木下尚子 1982「弥生時代における南海産貝製腕輪の生成と展開」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』pp.413～443
- 木下尚子 1988「南海産貝製腕輪はじまりへの予察」『永井昌文教授退官記念論集 日本民族・文化の生成』pp.519～544 六興出版
- 木下尚子 1989「南海産貝輪交易考」『生産と流通の考古学』I 横山浩一先生退官記念論集 pp.203～249
- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版局

第Ⅱ部

- 島袋春美 1981「南島から見た貝の交易」『考古学ジャーナル』311 pp.9～13 ニューサイエンス社
- 新里貴之 2001「物流ネットワークの一側面」『南島考古』20 pp.49～66 沖縄考古学会
- 高倉洋彰 1975「右手の不使用－南海産巻貝製腕輪着装の意義」『九州歴史資料館研究論集』1 pp.1～28 九州歴史資料館
- 高宮廣衛・知念勇 2004『考古資料大観』12 貝塚後期文化 小学館
- 永井昌文 1977「貝輪」『立岩遺蹟』pp.267～283 河出書房新社
- 仲宗根求 1995「『ゴホウラ製腕輪』の製作工程に関する資料」『南島考古だより』53
- 仲宗根求 他 2001「読谷村出土の弥生土器・弥生系土器について」『読谷村歴史民俗資料館紀要』25 pp.59～79 読谷村教育委員会

報告書

- 岩滝町教育委員会（現、与謝野町）2000『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告書第15集
- 沖縄県教育委員会 1984『野国－野国貝塚群B地点発掘調査報告』、沖縄県文化財調査報告書第57集
- 沖縄県教育委員会 1996『平屋敷トウバル遺跡』、沖縄県文化財調査報告書第125集
- 鹿児島県教育委員会 1986『長浜金久遺跡』、鹿児島県埋蔵文化財調査報告書第42集
- 京都大学大学院文学研究科 2005『紫金山古墳の研究』
- 檀 佳克編 2004『ナガラ原東貝塚』5、古学研究室報告第38集

図版出典

- 図1 木下1996p265より転載、一部改変
- 図2 1・2・4・5・6・7 川口実測・トレース、2『平屋敷トウバル遺跡』より再トレースおよび一部加筆
5－山野ケン陽次郎氏実測・川口トレース
- 図3 『紫金山古墳の研究』2005 p153・p154より転載
- 図4 1 川口2007 p39より転載、2 木下1996 p245より転載、写真川口撮影